

## 斑点模様

### 1. ミドリヒョウモン

ヒョウモンチョウとよばれるチョウの共通点は豹柄模様で草原が生息地です。近年の温暖化で北上してきたツマグロヒョウモンは街中でパンジーやビオラを食い荒らしていますが、草原から山地まで広い範囲に生息しているのがミドリヒョウモンです。当然打吹山でも出会う、幼虫も目立ちやすい種です。幼虫の食草は野生のスミレですが、打吹山ではオオタチツボスミレのみで出会っています。オオタチツボスミレが大きく成長した5月中下旬、終齢幼虫が葉表に出てくるからです。棘のたくさんついた突起がいっぱいの幼虫ですから手を出しにくいでしょうが、毒はなく刺すこともありません。



秋、産卵にきた雌

成虫は6月末に羽化します。暑い時期は夏眠といって活動を停止しますので、見ることは少なく、秋になってから吸蜜や産卵の時によく姿を見ます。翅表が豹紋、後翅裏面に緑の筋があるのが特徴です。黄橙色に黒い斑点は、木漏れ日の差し込む林下では隠蔽効果があると言われますが、草原の上を飛ぶときはよく目立ち、警告色の効果があります。毒はなく、捕食者に対して何を危険だよとっているのでしょう。夏眠は藪の中と思われそうですが、羽をたたんで休止します。裏面の方が陰に溶け込みそうです。豹柄模様

と関連した行動があるか、観察データが欲しいものです。

秋遅くにはスミレの葉はもうありませんが、株の近くの樹幹や枯れ葉などに産卵します。姿のないスミレがわかる能力を持たせた自然は偉大です。

### 2. ヤマジノホトギス

ホトギスの仲間は独特の花型でよくわかります。幅が広い葉の単子葉植物で、ユリに近いので3枚の萼と3枚の花弁を持つのですが、萼と花弁にあまり差がなく、花被片と呼びます。萼が外花被、花弁が内花被です。幅の広い方が外花被で、内側の色も開き方も同じです



花被片の模様が白地に赤紫色の斑点を散らしたようになっています。この模様からホトギスという名称がつけられたのですが、牧野植物図鑑には鳥類のホトギスの胸の斑紋に似ているからと記されています。しかし、鳥のホトギスの模様は横縞で少しも似ていません。鳥のホトギスの口内は赤く、「鳴いて血を吐く杜鵑」といわれるように、飛び散った血が花被片に付いたと考えたくなります。林縁のやや水分の多い場所に生育するホトギスと鳥のホトギスの活動場所、渡来直後のよく鳴く時期と開花時期がうまく合致しています。



めしべの先端は3つに分かれ、さらにその先が2つに分かれています。この部分も花被片と同じように赤紫色の斑点があり、飛び散った血を受けたようになっています。おしべにはありません。

葉にも斑点模様がありますが、強い緑色のため暗く見えています。花被片と化した葉は、光合成をしないうえに緑色が抜けて白くなったことで暗部の色が見えるようになったと考えられます。紅葉のしくみと同じです。花粉の運搬者へ存在を知らせる目印には十分なり得る模様です。